ヨーロッパ・エスノロジーにおける フィールドワークへのスケッチ

特にヴォルフガング・カシューバとイーナ＝マリーア・グレヴェルスを例として ―

河野　眞

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail:takakons@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

On the Fieldwork in the European Ethnology in Germany (Sketch) – especially on the research methods of Wolfgang Kaschuba and Ina-Maria Greverus

The present paper is an introduction of the methods for the field work focused on the current situations of the EU countries today. From several representatives of this field of the academic world here attention is payed to two German scholars of the European Ethnology whose theoretical essays were already translated to Japanese by me. At first Wolfgang Kaschuba (born in 1950), a professor of Berlin University (HU) and a director of its Institute of European Ethnology, plays the big roll with his EU-wide viewpoint and his active participation to the current social issues. To know that, it seems to be appropriate to look at the lecture he delivered in 2008 in Seoul in South Korea. There he told about *"Europe and Globalization. New Challenges to the European Ethnology"* (Japanese translation 2010) to his audience consisted not only of the South Korean Folklorists, but also of the Folklore Specialists from Japan and other East Asian countries. His theory and method of Folklore Studies is significant especially in the current situations of the world today, since for example, just now, a lot of refugees from the middle East to European area causes various confusions and demands the proper solutions in the societies accepting them ― not to mention, the similar problems are not avoidable almost all around the world.

As the second person Ina-Maria Greverus (born in 1929), a woman professor emeritus of the University of Frankfurt am Main, Germany, a founder and director of the Institute of European Ethnology in the University of Frankfurt a.M for a long, is a pioneer of Ethnology of the multicultural societies. Her lecture *"Performing Culture. Field work: male – female – human"* (Japanese translation 2013) originally given in 1997 at the general meeting of the German Folklore Society in Marburg, federal state Hessen in Germany, has an essential meaning as an enlightening example for the folklorists aiming at theoretical solving of the current issues of the multicultural societies. Since her lecture explains how the daily life' study is to be carried out through presenting the example of her research in Sicily, Italy, that successfully elucidates the constancies and changes of the everyday life of the habitants of the small town of Italy *Gibellina* reconstructed after it had been attacked by a destructive earthquake in 1968.

はじめに

筆者は先に、本誌に愛知大学国際コミュニケーション学部のフィールドワークの経緯と課題に関する一文を寄せた[1)]。1998 年 4 月に発足した愛知大学国際コミュニケーション学部が、正課の一つとしてはフィールドワークを導入した経緯、またそこで目指したフィールドワークのあり方、さらに導入したフィールドワークの科目が目下（決して不振ではないが）盛況を呈するところまで行っていないことに鑑み、今後の方向について考え方を提示したのだった。本稿では、そうした課題をも射程に置きつつ、むしろ現代の日常世界への探求について経験と成果を蓄積してきたドイツ学界におけるＥＵ研究に焦点をあてようと思う。

これを書いているさなか、ヨーロッパは大きな変動に見舞われている。世界を震撼させたパリの数か所で相次いで起きた襲撃事件（2015 年 11 月１３日）である。これをどう見るかは立場によって異なるが、かねてドイツの日常研究が重視してきた課題が改めて重みを以て受けとめられている。すちわち、多文化社会としてのヨーロッパをめぐる諸問題である。

そこでは特に二つの（一対と見ることもできる）概念が注目されている。差異と統合である（Differenze und Integration）である。パリでの同時襲撃事件などに直面すると、ＥＵがこれまで紆余曲折はあれともかく進めてきた Integration の失敗との声も聞こえてくる。しかし、ＥＵの歩みは後戻りできるものではないとの見方もまた強い（筆者もそうした見方に立っている）。またそれをもふくめて日常研究がある種の危機の研究と重なるような様相となっている。

もとより今回のような惨事を予想していたわけではないであろうが、EU 諸国における多文化社会研究の動向には注目すべきものが少なくない。それには、伝統的な民俗学を引き継ぐ性格にあるヨーロッパ・エスノロジーも一翼を担っている。今回は、この部門の特にフィールドワークにおける問題意識と方法をうかがえる事例を紹介しようと思う。またそれにあたって、今回は、筆者がこれまで訳出紹介してきた資料から拾ってみた。ここではインデックス程度にしか取り上げることできないが、この小文を手がかりに、それぞれの拙訳などでたしかめてもらえればと願っている。ここで取り上げた二人は､いずれもこれまで日本ではほとんど紹介されてこなかったが､ドイツ語圏のヨーロッパ･エスノロジーではフォークロリストおよびエスノローグとして中心的な存在である。

1)「愛知大学国際コミュニケーション学部のフィールドワーク ― 経緯とこれからの課題へのスケッチ －」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明 21』第 31 号（2013 年）, p.1-14.

1. ヴォルフガング・カシューバの多文化社会研究の視点：ソウルでの講演記録（2008 年）・から

はじめに注目するのは、ベルリン大学教授ヴォルフガング・カシューバである。氏は1950 年 1 月 1 日にドイツのバーデン＝ヴュルテムベルク州ゲッピンゲンに生まれ、同州に所在するテュービンゲン大学へ進み、そこでヘルマン・バウジンガーについてその改革志向の強い民俗学、すなわち経験型文化研究を学んだ。ベルリン大学の民俗学科（ヨーロッパ・エスノロジー学科）を主宰するのは、ちょうど東西ドイツの再統一の時期からであり、以来、斯界の第一人者である。そのカシューバが、2008 年 12 月 12 日にソウルの民俗博物館において講演を行なった。筆者はその直後、同氏を招請した中央大学校の任章赫教授から郵送でドイツ語の講演原稿を受けとった。そして、その内容が興味深いものだったので、早速、愛知大学の紀要の一つに載せたのだった。講演のテーマは「ヨーロッパとグローバリゼーション：ヨーロッパ・エスノロジーへの新たな挑戦」である[2)]。講演の全体は拙訳を見ていただければよいが、ここでは特に後半の「ヨーロッパと世界：グローバリゼーションの文化的地平」あたりを取り上げて、簡単に解説を加えてみたい。

なおその前に、筆者が手がけたもう一つの紹介にもふれておきたい。カシューバが主宰するベルリン大学ヨーロッパ・エスノロジーの行き方については、座談会の記録を本誌上で紹介したことがあったのである。2001 年に、ベルリン大学のヨーロッパ・エスノロジー研究所において「ヨーロッパ・エスノロジーの現在の今後」のテーマで行われた企画である[3)]。それには、ヴォルフガング・カシューバとその同僚、ペーター・ニーダーミュラー（現在･ベルリン大学教授）やシュテファン･ベック（同）やギーゼラ･ヴェルツ（フランクフルト大学教授）、それにベルンド･ユルゲン・ヴァルネッケン（テュービンゲン教授）が意見を交わしている。中身は、多岐にわたるが、主なところでは、ヨーロッパ･エスノロジーの課題として主に＜比較（研究）＞、＜歴史化（歴史学への志向）＞、＜人類学化＞が取り上げられている。なお座談会記録の翻訳には、かなり詳しい解説を

2）ヴォルフガング・カシューバ（著）河野（訳）「ヨーロッパとグローバリゼーション：ヨーロッパ・エスノロジーへの新たな挑戦」 － カシュバ（ベルリン大学ヨーロッパ・エスノロジー学科教授）の韓国ソウルでの講演（2008 年 12 月 12 日）の翻訳と解説 Original: Wolfgang Kaschuba, *Europa und die Globalisierung: Neue Herausforderung für die Europäische Ethnologie. Ein Vortrag in Seoul, 12. XII.2008*. 愛知大学国際問題研究所『紀要『第 135 号（2010 年）, p.271-295.

3）「ベルリン・ディスカッション：ベルリン（フムボルト）大学におけるヨーロッパ・エスノロジーの十年と今後の課題 － ヴォルフガング･カシューバ／ペーター･ニーダーミュラー／ベルント＝ユルゲン・ヴァルネッケン／ギーゼラ・ヴェルツの座談会：司会：シュテファン・ベック／レオノーレ・ショルツェ＝イールリッツ（2001）」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明 21』第 30 号（2013 年）, p.89-137. 原 著：*Berliner Diskussion: Perspektiven Europäischer Ethnologie – Versuch einer Zwischenbilanz. Gespräch zwischen Wolfgang Kaschuba, Peter Niedermüller, Bernd Jürgen Warneken und Gisela Welz. Programmdirektoren: Stefan Beck und Leonore Scholze-Irrlitz.* In: Berliner Blätter für Europäische Ethnologie, Jg.23（2001）, S.167-190.

つけておいた。

それは参考までに補足したのだが、これから例にとるソウルでの講演では、カシューバ教授は、ドイツ民俗学の一つの大きな方向として、ＥＵのホットな問題に焦点を当てて論じた。たとえば次のような考え方である。

ヨーロッパと世界。ここではじめに特に感銘を深くするのは、グローバリゼーションがどれほど急速に私たちの尺度の変化をもたらしたか、ということです。なぜなら、昨日、多くの人々には、＜ブリュッセルの力のカルテル＞と映ったヨーロッパが、すなわちイギリス、ドイツあるいはフランスのアイデンティティといった＜異質な＞脅威と見えたヨーロッパなるものが、今日、突然、多くの人々にとって＜ふるさと＞となったからです。ふるさと、つまり、親しみのある、まもられてもいる近しい地平です。

それは不思議ではありません。グローバルな諸問題とグローバルな地平という新たな＜不可視性＞に直面して、ヨーロッパが突然＜見渡せる＞ものとして訴えてきているからです。旅行によってもそうであり、小説を読むことによってもそうであり、ヨーロッパを枠とする法律や価値によってもそうなのです。服飾のスタイル、食文化、ミュージック・ボックス、そのいずれにおいても、国民的な角はかなり前からとれていて、たがいに入り混じっています。

グローバリゼーションはリアリティでもあればディスクールでもありますが、それはまたヨーロッパを＜地球（グローバル）の片隅（ローカル）＞にもしてしまいました。いわば＜ヨーロッパ村＞であり、そこを出て進むと、その先は＜広い世界というジャングル＞へと道は延びています。

そこで、私のはじめの事例を挙げましょう：＜ヨーロッパ社会国家＞というモデル、これまたネオリベラルな資本主義とグローバルなマーケット政策を背景にして、新たな魅力をもっています。ヨーロッパの諸々の社会にとってだけでなく、むしろ他の諸大陸においても。ウォール街の危機の後のアメリカですらそうなのです。

これに続くパッセージでは、現代では、国際政治やグローバルな次元での経済動向や国家の経済政策が日常生活にほとんど直結している状況にあるのを見据えることを促している。もっとも、これを聞いても、今日の私たちはそれほど奇異の感じを受けない。しかし民俗学やエスノロジーが、私たちのあいだでそうして姿勢をすでにもっているかどうかは疑問である。どの辺りに、それに向けての手がかりを見るのか、その見解を聞いてみよう。先ずは、ナショナルな要素とインターナショナルな要素という座標軸である。

なぜならこの＜社会国家＞は、一つ目に、（社会が一緒になって財政を支え保障する）物質的な保険システムを用意しているからです。とりわけすべての人々に向けられた疾病保険、失業者対策、老齢者対策。二つ目に、この社会原則は、それに見合う政治的な議論を可能にします。たとえば、多様な社会的グループのあいだの経済的分担と社会的公正にかかわる議論。つまり、＜公正をめぐる議論＞への請求権が存すると言ってもよいでしょう。幾つかの研究が示しているように、社会的弱者や文化的＜他者＞をよりよく、より持続的に保護するのは、他の諸規則よりも、むしろかかる状況にほかなりません。

＜社会国家＞をめぐるそうした論議を観察するのは、エスノロジーの側からの研究にとっても啓発するところが大きいのです。なぜなら、社会生活上の規則や道徳や倫理をめぐるポピュラーな観念がどのようであるか、それを見わたすことになるからです。そこでは、政治的な文化がどのように見られているか、また現に活動している社会的エリートが人々の目にどう映っているのかも分かってきます。

このエリートたちは、この数年、たいそう悪評に見舞われています。政治家たちもそうですが、＜上にいる＞彼らは現実に疎く、しかし企業に親しい決定をしている、と言うのです。あるいは、経営者たちは、自分たちは株式報酬で肥え太り、インターナショナルなヘッジ・ファンドを通じて見境なく＜ナショナルな＞諸形態と労働市場を破壊しているとも言います。それゆえ＜社会的公正＞は学問と政治のなかで再び重みのある言葉となっているかに見えます。もちろんそれは、必ずしもヨーロッパだけのことではありません。

カシューバは、次にヨーロッパとイスラームとの関係、またイスラーム系の移民をめぐる問題をも、日常の次元でとらえることが、ヨーロッパ・エスノロジーの課題であるとしている。これは、今日いよいよホットな話題となっており、また、現実の難問でもある。

やはり見通しが利かないことについて、二つ目の事例を挙げましょう。特定の社会的・文化的なグローバリゼーションの進行に対して、ヨーロッパは自分をまもろうとつとめています。それはニューヨークでの９月 11 日（2001 年）のできごとを機に特に明白になりました。それ以後、ヨーロッパは世界各地からの移民に対する関係を変化させました。＜ 9.11 ＞以来、特定の移民グループは、文化的異質性と実存的な脅威の新しい形態に関係づけられました。とりわけイスラームの位相は、ヨーロッパでは、あらゆる＜不信仰＞を攻撃するイスラームのテロリズムの温床と専らみなされています。それに対して、イデオロギーと政治の防御壁を築かねばな

らないと言うのです。＜ムスリム＞あるいは＜オリエント＞と見える者は空港で厳しくチェックされます。公共の場所でのヴィデオによる監視では、顔を識別する＜倫理的な＞ソフトウェアが導入されています（たとえばロンドンを訪れた人は、毎日、300 回撮影されます）。ムスリム居住区のように移民が住む地区は、特にきびしくチェックされます。また＜イスラームの＞トルコの EU への受け入れには、＜キリスト教の市民と政治家＞は抵抗しています。

たしかに、テロリストとの闘いは、政治的にも警察との関係でも効果的に進められるべきものでありましょう。またこれらのテロリストの多くが、コーランの章句を、彼らの姿勢を正当化するために引用しているのも事実です。それによって、彼らは、＜真のムスリム＞、また＜神の戦士＞という様式に自分をあてはめようとしています。近代的な宗教理解の意味では、彼らの言動はまったく不当であります。それゆえ、殺人の目的のためにコーランを口実にするテロリストを非難するイスラームの聖職者も増えています。

特にイスラーム圏に出自を負う人々とヨーロッパのいわゆる在来の人々との関係は、必然的に宗教の次元の問題を含むことになる。それは伝統的なヨーロッパにおいて、今日では最も　　マイノリティである。日常生活の次元では、たとえば生活空間の一角にモスクが出現するといったことに端的に現れる。

私の三つ目の事例は、この状況と密接に関係しています。なぜなら宿命的とも言うべきか、＜宗教と宗教性＞のグローバルな役割をめぐる近年の議論においても、これら＜神の戦士＞を孤立させることにあまり成功していないからです。ムスリムの人々をひっくるめて嫌疑をかける動きが高まる一方であるのは、ヨーロッパだけのことではありません。それと共に、彼らもまた、＜ひっくるめて＞宗教的ならびに人種的に差別されていると感じています。かくして、彼らは文化的な＜異質性＞として非難されています　－　マイノリティとしての彼らの多くが実際にはヨーロッパ諸国で生れ育ったにもかかわらず。逆に、自称＜ヨーロッパ人＞によるいわゆる違和感から、独自のエスニックおよびナショナルな自己像を正当化されたりしました。そうした議論の行き着く先は、＜ヨーロッパの＞言語・文化・社会は、この＜異質性＞から救い出されねばならないというところに行き着きます。

イメージをめぐるかかる＜文明の＞対決から、新たな原理主義者たちが生れてきます。それはキリスト教の側でも、イスラームの側でも同様です。かくしてムスリム団地は、多くの若いムスリムにとっては、敵視される社会の中で、事実上、唯一の安全な場所となってゆきます。彼らには教育の欠如のために職業の選択の幅が狭

められてもいますから、そこで＜原理主義者たち＞や極端な場合は＜神の戦士＞のポスト、彼らに宗教グループでの尊敬と証人を約束することになります。

今日となっては、カシューバの論説は現実に臨んで大方が感じる構造をなぞっているとも見えるが、日常研究の課題としてこれらを直視すべしとの主張は、それが民俗学を素地にした学問分野であることを見ると啓蒙的な刺激ではあったろう。これは、ソウルでの講演であり、今日の民俗学の課題を提示するのがそこでのモチーフであった。内容にかかわるところで言い添えれば、多文化社会をどのように理想的に運営しようとしても、対立や悶着を避けることはできない。もっとも、何らかの意味で単一社会であっても、衝突も揉めごともない社会などは存在しない。他文化にちなむ紛糾を、そうでなければ穏やかな社会が続いていたかのような幻影と対置させてファナティックに忌避するのが不当であることを指摘するのは、多文化社会を肯定するリベラルな識者に共通した冷静さであるが、カシューバもその一人である。

これに対応して、と言うべきか、フランスでもドイツでも、市民的位相においては、（文化と宗教の擁護を隠れ蓑にして）よそ者への敵意が広がりをみせています。とりわけ、トルコやアラブ諸国やアフリカの国々からの人々に対しては、あからさまな人種的な姿勢があらわになってきています。ヨーロッパの諸都市では現在、大小のモスクが立てられようとしていますが、偏見があらわになるのは、特にそうした場合なのです。事態を敵視する人々は、都市景観の＜異郷化＞を口にします。またキリスト教やキリスト教的な価値観の擁護が叫ばれ、都心部がイスラーム集団によって社会的に異郷化されることへの危険も論じられます。

ムスリム団体はこれまた、自分たちの神殿をいつまでも裏庭やアパートに閉じ込めるのを潔しとはしません。むしろ、モスクは立派な建造物、しかも＜オリエント風の＞装飾と尖塔をもつ殿堂として独自の美しさを与えようとしています。できうべくば、都会の人目につくところに＜自分たちの＞場所をしめようともしています。またこれに対抗するのが、ラディカルなイスラームのコーラン学派です。彼らの目から見ると、モスクを中心とした集まりは＜リベラル過ぎる＞のです。彼らは、＜不信仰者＞への闘いを口実にして、都会の開けた場所からは自ら姿を隠してしまいます。その学派のなかに巣くう＜憎悪の説教師＞に教えこまれた者は、誰であれ、やがて公共の統制からも国家の管理からも抜けてゆきます。

イスラームとキリスト教、その両方の原理主義者たちは、こうして螺旋状に動いています。敵側のどんなステレオタイプも、自分たちの新たなステレオタイプによって反応し返します。かくして差異の政策が推し進められ、そのなかで憎悪と相手側

へのアグレッシヴなイメージが濃度を増してゆく。そこでは、＜大仰な＞宗教的な伝説も投入されます。イスラームの諸集団は、千年前にエルサレムをめぐって闘ったキリスト教の＜十字軍＞という神話的な的のイメージに改めて息を吹き込み、他方、キリスト教の原理主義者たちは、こちらはこちらで、五百年前にキリスト教ヨーロッパを脅かしたトルコ軍のウィーン包囲を記憶からよみがえらせます。

そうした歴史を相手の小細工が、文化的な爆発力をことさら煽っている。つまり＜文明の衝突＞という誤ったイメージをいかにも証明しているように見えるからである。＜文明の衝突＞、これを世界にまき散らしたのは、サミュエル・ハンティントンをはじめとする愚かな賢者たちでした。諸文化が互いに闘っているのではなく、角を突き合わせているのは幾つのグループであり利害関係のです。文化を論じるのは、政治学者たちの仕事ではないはずです。

エスノロジーの面から都市研究を進めていると、多くの町で、イスラームとキリスト教の双方の原理主義者たちが、そうした衝突の線に沿って生成されるのを見ることになります。他者を敵のイメージとして持つことなくしては、自分の側の賛同者をあつめることはかなり難しいでしょう。－　しかしそのため、エスノロジー研究も、宗教の分野ではますます困難になり、それどころかリスクも高まっています。もっともこれも、グローバリゼーションへのヨーロッパの関係を照らし出すには、必要なライトの幾らかにすぎませんでした。その際、私たちの研究から得られた印象を言えば、今日のヨーロッパは、十九世紀は二十世紀の＜自己中心的な＞歴史とは大きく違っていることです。―　世界に開けた場所としての度合いは高まっています。つまり、諸文化の出遭いと相乗、諸文化の刺激と演出の場所なのです。―とりわけ日常世界の空間として、そのなかには、移住と流動性、中間媒介とコミュニケーション、ツーリズムと音楽、これらが新しい動きをと開放をもたらします。そのなかでは、文化的な＜ハイブリッドの＞型と混合の実際行動が成立します。

ややパセティックなまとめ方になりましたが、それはもちろんヨーロッパにだけあてはまるのではありません。ソウルでも東京でも、ニューヨークやメルボルンでも、こうした開かれ方や混じり合いが＜世界文化＞へとずっと前から進んできています。むしろヨーロッパよりもそれは早かったかも知れません。 いずれにせよ、かくしてヨーロッパにおいて、文化は＜ナショナリストたち＞がどうしようと、先ずは＜ナショナル＞ではもはやなくなっています。文化や、インターナショナルな、トランスナショナルな交替の過程、流れと動きの過程、交替と混じり合いの過程に巻きこまれています。たしかに今日は今日で新しいダイナミズムを伴ってはいても、そうした過程はすでに久しいのです。

最近の出来事を、これに並べてもよいだろう。まだ記憶に新しいが、パリ市内にある風刺週刊新聞「シャルリー・エブド」の本社を、二人のアルジェリア出身の男がカラシニコフ銃で襲撃し、編集長など死者 12 人を数えた他、多数の重傷者が出た。2015 年 1 月 7 日のことで、イスラミック・ステイトへの帰依を精神的な支柱とした過激派の犯行とされる。しかし事態はそれでは収まらず、やや月日を経てさらに規模の大きなテロ事件が発生した。はじめにも挙げた話題だが、同年 2015 年 11 月 13 日に、パリ市内の劇場やレストランが相次いで襲撃され、死者は 130 人、負傷者 300 人を超える大惨事となった。ついこのあいだの出来事である。

しかしまた、その惨事をも幾らか色褪せさせてしまうほどの規模で、シリアからの難民がヨーロッパに大挙して流入している。とりわけ 2015 年後半には、その規模は加速的に増大して、数万どころか数十万にふくれ上っている。そのなかでは、ヨーロッパや経由地のトルコやギリシアへ向かう難民の船が沈没する悲劇も派生した。特に 12 月 9 日朝にギリシア東海岸ファルマコニシ島沖で、難民約 30 人が乗っていたとみられるゴムボートが転覆し、子供 10 人余りが死亡した。その出来事は、（同種の事故はそれまでにも起きていたが）特に大きく報道され、ＥＵ各国の人道主義の世論を刺激して、難民受入れの機運を高めた。ギリシアからドイツへ向かう長蛇の列をなして歩く中東難民の様子も世界中に連日配信された。他方で、難民の通過国となったスロヴェニアやハンガリーの反応は複雑であり、またポーランドやチェコなどは自国への受け入れには余力がないとして難色を示している。

全体としては難民への寛容政策が優勢のようであるが、なかでもドイツの難民受け入れへの積極性は際立っている。2015 年 12 月 8 日のドイツ各紙は、バイエルン州政府の発表として 2015 年のドイツへ到達した難民が 100 万人に達したことを伝えた[4)]。と共に、ドイツ国内でも、急激かつ大規模な中東難民の増加には危惧の声も高まっており、どの程度の調整を要するかはともかく、転機を迎えつつあるようにも思われる。

これらに対して、ヨーロッパ・エスノロジーがどのように自己分野の課題を設定するかが問われている。すでに難民のドイツ社会への同化過程は、近年ではこの分野の概説書や論集では必ず盛りこまれるテーマとなっている。これらについても、機会があれば、取り上げてゆきたい。

4）たとえば参照 ,『日本経済新聞』2015 年 12 月 9 日付朝刊

2. イーナ＝マリーア・グレヴェルス女史のフィールドワーク：シチリア調査における視点

流動性の下にある現代ヨーロッパの日常に早くから取り組んできた民俗学系の研究者、むしろその草分け的な存在として、イーナ＝マリーア・グレヴェルスにも注目しておきたい。1929 年 8 月 29 日にドイツのザクセン州ツヴィッカウに生まれ、女性の民俗研究者としてのパイオニアでもある。その講演記録「ジェンダーから見たフィールドワーク文化的営為としてのパフォーマンスにおける男と女と人間[5)]」に筆者は興味をもって、少し前に試訳して、これまた本誌に載せた。

グレヴェルス女史はフランクフルト・アム・マイン大学のヨーロッパ・エスノロジー学科をその創設以来主宰し、特に外国人問題や外国での調査研究に特色を見せている。英米の文化人類学に厚い知見をもつことにおいて開拓者であるが、また特に集中して取り組んできたフィールドは南イタリアである。それには、女史が研究者として活動をはじめた 1960 年代から 70 年代には南イタリアはドイツへのガストアルバイターの大きな送り出し地域であり、それへの研究意欲の故という面もあったようである。この講演では、偉大な文化人類学者ブロニスワフ・マリノフスキーのフィールドワークの方法を部分的には批判をも含めて見直すことから始め、ジェンダーの観点を取り入れて自身のフィジー諸島での調査にふれた後、現代のシチリア島西部でのフィールドワークの蓄積とその視点を論じている。とりわけ地震で壊滅した小都市とその移転・再建をめぐる調査をもとに現代のフィールドワークを論じている。その内容については詳細な報告書が作成されているが、講演では、地震で倒壊したジベッリーナの移転と、被災地のモニュメント化、それにあたっての行政と住民の疎隔などを明るみに出している。またそれを一種の参与観察によって活写している。女史は、大学で学業を終えたころ、特に研究という意識をもたずに、シチリア島西部の辺地を訪れて滞在したらしい。一帯はシチリア島のなかでも特に貧しい地域でもある。そこで羊飼いや漁民との交流が始まり、それが再び女史を研究へと引き戻したとも記されている。

> 私がシチリアへ戻ってきたのは、さらに 15 年経った 1996 年のことでした。これは＜再訪スタディ＞で、私たちが 1981 年に訪れた町は先に 1968 年に地震に見舞われ

5）イーナ＝マリーア・グレヴェルス（著）河野（訳）「ジェンダーから見たフィールドワーク文化的営為としてのパフォーマンスにおける男と女と人間」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明 21』第 31 号（2013）, p.101-136.（ 原 著：Ina-Maria Greverus, *Performing Culture. Feldforschung männlich – weiblich – menschlich*. In: Christel Köhle-Hezinger, Martin Schafre, Rolf Wilhelm Brednich (Hrsg.), Männlich. Weiblich. Zur Bedeutung der Kategorie Geschlecht in der Kultur. 31 Kongreß der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde, Marburg 1997. Münster u.a. [Waxmann] 1999, S.75-98.

ていたため、移転先としてベリーチェ谷に建設されたニュー・ジベッリーナ市へ入ったのです。つまりジベッリーナ・ヌオヴァですが、それはポストモダンのコンセプトによる総合的な事業でした。破壊された元のジベッリーナ・ヴェッキャ*にはセメントが流しこまれました。アルベルト・ブッリの＜おそらく最もあざやかな作品＞として白いコンクリートのヴェールがかけられています。地震で壊れた町の残骸が、その記憶を永遠にとどめるように、と言うのです。

*を付した人名や語句には、拙訳では注をつけて説明したが、ここでは省略する。

なおこの講演は、ドイツ民俗学会の隔年の大会がマールブルク大学で開催されたときのものである。その開催地ということもあったのであろう、同大学に大学生の頃から助手になるまで在籍して研究者となったグレヴェルス女史が講演者に招待されたのだった。さらに、女史が、ちょうどフランクフルト大学で定年を迎える時期にもあたっていた。

講演の後半は、女史とその研究仲間の永年の研究フィールドであるシチリア島の話題である。補足すると、ベリーチェ谷はパレルモの南西の山間からシチリア島南海岸にかけて北東から南西に走る約 77km の谷で、1968 年 1 月に大地震に見舞われた。谷間の中心都市であった人口約 7000 人のジベッリーナは全壊し、そっくり移転・再建されることになった。グレヴェルス女史の講演は、その地震に見舞われて壊滅した町を近隣の別の場所にそっくり移設し、倒壊した町の方はコンクリートで固めて現代藝術的なモニュメントにされる、という特異なできごとを枠組にして、現代の世相を点検するという組み立てで、それを批判精神ゆたかに再現している。

ジュゼッペ・バルベラはかつて社会改良家ダニーロ・ドルツィ*の協力者で、今は「メリディオーネ経済・社会復興センター」の所長さんですが、1980 年代には私たちの会話のパートナーでした。そして 1996/97 年には著作『天空のオフィス』のなかで再び公開の質問調査を発表し、事実それはジベッリーナの「ベリーチェ谷研究センター」によって地震被災住民のあいだで実施されました。特に高齢の被災者たちは元の場所での建設を希望していましたが、そうした元の土地にとどまりたいという齢者たちの願望ではなく、新しい町で新しい時をはじめたいという若者たちの希望の方が満たされました。しかし現実は願望通りだったのでしょうか。その後の報告は矛盾だらけです。今なおそうなのです。しかもバルベラのアンケート調査によると、住民の意思が直接たしかめられたことは一度もなかったのです。

しかしニュー・ジベッリーナで語られているのは別の言葉です。インターナショナルなアヴァンギャルド藝術とでも言うべき新しい町に響くのは、彫刻群や劇場公

演や博物館の企画や『迷宮（ラビリンティ）』というタイトルを掲げた贅沢なイラスト紙などを通じた声の方なのです。もっとも新聞の「地域の文化」というサブタイトルをめぐっては意見はまちまちではあるようです。とまれ、ニュー・ジベッリーナの位置は元あった場所から 25km はなれています。そこが地震に強い地盤だから、というのが理由の一つです。しかし別の理由として、ベリーチェ谷一帯の最大のマフィア団体が土地の売却で大儲けができたことを挙げる人たちもいます。いずれにせよジベッリーナを藝術作品にした最も強力な推進者は、当時のジベッリーナ市長で今は参議院議員としてローマに居を構えているルドヴィコ・コッラオ氏*でした。実際、町を藝術作品にしたのは彼でした。しかし私たちが 1996 年に訪れることになった瓦礫の山（1997 年もそのまま放置されていた）自体は、新しいジベッリーナ市長の事業だったのでしょうか？ たしかに、藝術都市（これも住む人の意思がたしかめられたわけではなかったのですが）の住民の壮大な構想をたたきつぶしたのは新市長でした。あるいは廃墟は＜地震＞という投機の申し子です。地震を念頭においたシンボルと思われますが、新しい教会堂が建設されるかも知れません。そのさいニュー・ジベッリーナの目印になるコンクリートの巨大な白い球体を村から運び出す予定であるとのことです。そのかたまりは、今はまだ古い教会堂の倒壊した屋根のそばに転がっています。五千人の住民は、広い雑然とした敷地に新しい町をつくっています。そこには人工的な施設がいくつもあります。南イタリアで住民たちのコミュニーションの中心になる広場（ピアッツア）はもう一つのメルクマールのはずですが、空っぽなのです！ 一体何が起きたのでしょう？ と思うと、いつのまにか若者向けのスケート場２リングが姿を見せています。元の町の主役であった年配の人たちが酒場の片隅にすわっているのを見かけることはあります。しかしそれらを除けば、1996 年に二度そこを訪れたとき、ほとんど人気（ひとけ）は感じられなかったのです。1997 年も、広場（ピアッツア）には誰も見当たりませんでした。例外は土曜日の午後で、＜固まってぶらついている＞十代の若者たちで埋まっていました。人々の願いをあつめた＜文化の革命＞は緒に就いたのでしょうか。土曜の午後がともかくそれにあたるのでしょうか？ しかし住民数五千人の町の広い大通りを駆け抜けるのは車ばかりです。モダンな、ポストモダンな人工の街を走り抜けて車は一体どこへ向かおうとしているのでしょう？

災害からの復興が行政主導で、しかもそこにはさまざまな思惑がからみ、さらに利権すら取りざたされ、それも決して無根拠ではない、というのは現代では決してめずらしいことではない。正にそういうケースという面もあったらしい。

オールド・ジベッリーナはどうなったのでしょうか。これについて語ろうとする

と、いつも私は何かつかえてしまいます。建てこんだ家々に当時７千人の人々が暮らしていた古い小さな町は、倒壊の後セメントで固められました。追憶の場所？ 藝術作品？ 私たち以外にそこへ行く人は誰もいません。昔の小路をたどると、そこにもコンクリートが流しこまれています。２メートル近い高さのあった壁もセメントの大きな屋根で覆われ、小高い膨らみになっているところもあり、隙間に根をおろした灌木が光をもとめて格闘しています。アルベルト・ブッリ*のこれらの藝術作品は公式の名前は「亀裂（ピアッツアイル・クレット）」ですが、クレーパとも呼ばれています。ひび割れるという意味ですが、死ぬことをも指す言葉です。人々のあいだでは白い死に装束という言い方もされ、外部からやって来る人たちは死の迷宮とも評しています。ジッベリーナ劇場の名称のなかでイル・クレットは演劇的なパフォーマンスの場所で、中心にあるのは崩壊と再生の観念です。もっとも政治政党にとっては、その場を占めるのは老いた＜再建の市長＞であり、３年前に選挙で選ばれた彼の後継者であるのでしょう。対話が耳に入ってくることは一切なく、オールド・ジベッリーナは固められたままです。たしかに新旧二人の市長と私たちとの会話は慎重に準備され、新市長は私たちにも認められたいとの構えをみせました。ちなみに先の市長で今はローマにいる参議院議員は、理念は特定の土地にしばられるものではないと力説したものですが、彼はジベッリーナと袂を分かったのでしょうか。

私たちは地元の他の住民とも話をしました。＜コッラオ・シティ＞すなわち再建市長コッラオ氏の賛同者たち、それに懐疑派や反対派の人たちとも。対話がはじまったのは、私たちがそこを去らなければならなくなった頃でした。私にとっては、対話はさらに続くべきもので、またそうなってゆきました。・・・・

ここで名前の挙がる人々について補足すると、ダニーロ・ドルツィ（Danilo Dolci 1924-97）は西ヨーロッパの取り残されたような一角で貧困問題に取り組んできたカトリック教会系の活動家で、＜シチリアのガンジー＞とも呼ばれ、ノーベル平和賞にも二度ノミネートされた。かつてその下にいた若い協力者が、グレヴェルス女史の参与観察のなかでたびたび登場することになる。またアルベルト・ブッリ（Alberto Burri 1915-95）はイタリアの代表的な前衛藝術家で、地震で倒壊したジッベリーナの町のほぼ全体をコンクリートで固めて、巨大な空間モニュメントを出現させた。ルドヴィコ・コッラオ（Ludovico Corrao 1927-2011）はシチリア島トラーパニ県アルカモに生まれた地方政治家で、ジッベリーナ市長として大地震に襲われた町の再建に挺身して知られるようになり、やがて参議院議員に転じた。こられの人々の活動をも織り交ぜつつ、地震災害を経験した地域住民の動きを再構成したのが、グレヴェルス女史と女史が主宰したフランクフルト・アム・マイン大学ヨーロッパ・エスノロジー学科のプロジェクトであった。

シチリア島の民俗調査となると、伝統的なベファナ祭や、淵源までたどれば中世に遡るともされるトラーパニの復活祭の信奉行列（最近は観光の対象として人気が高い）などが通常は対象になるところであろうが、それらとは一線を画したフィールドワークであることには大きな意義がある。

*

今回は、近年のヨーロッパ・エスノロジーの動向として、ベルリン大学教授ヴォルフガング・カシューバと、フランクフルト・アム・マイン大学教授イーナ＝マリーア・グレヴェルス女史の取り組み方に注目した。女史はすでに定年退官となって久しく、カシューバも今年あたりが定年であろう。それゆえ次の現役世代の活動の実際を見る必要があるが、その場合にも、これらの傑出したリーダーが築いた土台を知らないわけにはゆかない。事実、それらは、フィールドワークの方法においても、ＥＵという新しい国家群の枠組みを取り入れるという面でも、またさらにＥＵを超えて中東まで伸びる広域という観点でも、ドイツ民俗学の後進でもあるヨーロッパ・エスノロジーの現在に直結している。

他にも、紹介すべきドイツ民俗学／ヨーロッパ・エスノロジーにおいて紹介すべきものが、方法論でも調査対象でも幾つかある。機会があれば、それらも取り上げてゆこうと考えている。

2015 年 12 月 10 日　Ｓ．Ｋ.